平成 30 年度 大分市教育実践記録

「深い学び」の積み重ねを通して、
自りつ（「律」「立」「率」）ができる子どもを育成する

～「知識・技能の活用・発揮」と「学び合い」に焦点を当てて～

大分市立大在西小学校　　平原皓介

１．　研究主題

「深い学び」の積み重ねを通して、自りつ（「律」「立」「率」）ができる子どもを育成する
～「知識・技能の活用・発揮」と「学び合い」に焦点を当てて～

２．　主題設定の理由

（１）新学習指導要領の改訂に伴って

「主体的・対話的で深い学び」これは、新学習指導要領の大きなキーワードの１つである。私たち教師が授業改善を重ねていく上で「主体的・対話的で深い学び」の視点は欠かせないものであると同時に、教師の仕事は授業である以上、常に「深い学び」の実現を目指さなければならないと考える。

また昨年度の自身の研究では、多少「主体的・対話的」のイメージがもてたと手応えを感じる部分もあった。しかし、“「深い学び」が実現できたとは言えない”という課題が残った。

そこで今年度は、日々の実践の中で「深い学び」のイメージを明確にするとともに、「深い学び」の実現によって、目指す子ども像にアプローチしたいと考えた。

（２）本校の研究と目指す子ども像から

本校の研究における目指す子ども像は以下の通りである。

○自分のことだけを考えるのではなく、友だちの意見を受けとめ、つなぐことができる子ども。⇒**自律**
○自分の頭で考え、自分自身で判断でき、自分の言葉で表現できる子ども。⇒**自立**
○友だちと協力しながら、自ら率先して（主体的に）行動できる子ども。⇒**自率**

※「自律」と「自立」の辞書的な意味は以下の通りである。「自率」は本校による造語。
・「自律」…自分で決めた規則に従う（従いわがままをおさえる）こと。
・「自立」…他の力を借りず、自分の力で身を立てる。自分の力で物事をやっていくこと。

今の子どもたちは数年後、常に目まぐるしい変化を続ける現代社会を生き抜かなければならない。時には自分の力だけで、時には他者と協力して問題を解決していきながら。そんな未来を見据えた時、自りつ（「律」「立」「率」）ができる子どもの育成を目指して教育活動を行うことには大きな意味があると考える。

３．　研究仮説

（１）身に付けた知識や技能を活用・発揮する場を仕組んだり、（２）子ども同士の学び合いの場を充実させたりすれば、“深い学び”が実現され、自りつ（「律」「立」「率」）ができる子どもを育成できるであろう。

研究仮説を上記のように設定した。「深い学び」を実現するための条件として、主体的・対話的な学びが連動していることは欠かせない。それを踏まえた上で本年度は、さらに（１）（２）のような手立てを意識的にとることにより、「深い学び」の実現を目指すこととする。

４．　研究内容・方法

【研究内容】

（１）身に付けた知識や技能を活用・発揮する場を仕組む

國學院大學教授の田村学氏は、「深い学び」について以下のように述べている。

・知識をつなぎ、結び付け、関連付けることが「深い学び」を実現していく。

・「『深い学び』とは、『知識・技能』が関連付いて構造化（個別の事実的な事実をつなげて概念的な知識にする）されたり身体化（身体と一体となって、無意識のうちに自動的に行為できるようになる）されたりして高度化し、駆動する状態（獲得した知識・技能を場面や状況によって自由自在に活用・発揮できる）に向かうこと」と言える。

つまり、深い学びを実現させるポイントのひとつは、教師が意図的に、**知識や技能を何度も活用・発揮させるような場を仕組むこと**と捉えられる。

その具体的な手立てとして、既習の学びを生かして課題解決に臨める場面を意図的に仕組んでいった。また、他教科との関連を図りながら単元計画（合科的な指導）を行うようにした。このような手立てをとることで、身に付けた知識や技能を何度も繰り返し活用・発揮させ、実生活にも生かせる資質・能力につなげていった。

（２）子ども同士の学び合いの場を充実させる

深い学びを実現させるためのもうひとつ手立てとして、「学び合い」の充実を図るようにした。イメージ的には「対話的な学び」に関わる部分が大きく、深い学びの実現には不可欠な要素であると考える。

学び合いの方法としては、簡単に言えば、話し合いやグループ活動と言える。ただしそこに教師の意図がなくては、本当の意味での対話的な学びや深い学びは期待できない。そこで、以下のような目的・ねらいをもって学び合いの場を仕組んでいった。

・一人では解決が難しい課題に対しての協働的な学び合い
・相手に説明する中で、自分の考えを確かにしたり構造化したりすることにつながる学び合い
・互いの考え方を比較したり関連づけたりすることで、新たな考え方に気付いたり、よりよい考え方を生み出したりできる学び合い

【検証方法】

授業中の発言や行動、ノート、振り返り（ワークシート・算数日記）等をもとに検証を行う。視点は以下の２点である。

（１）「深い学び」が実現されているか

『中央教育審議会答申』では、「深い学び」を以下のように例示している。

> 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう（学び）

『答申』の例示と、先ほど示した田村学氏の見解を踏まえ、本論文では、深い学びの姿（期待する子どもの姿）を以下のように整理し直した。これらに沿って子どもの姿を見とるようにする。

□ひとつひとつの知識をつなげたり生かしたりすることで、新たな知識が増えたり考え方が広がったりしている。
□自分と他者の考えを比較したり関連付けたりすることで、考えを改めたり新たな考えを生み出したりしている。
□自己の学びを振り返ることで、新たな課題を見いだし、さらなる解決策を粘り強く考えている。
□自分の考えを整理したり意味付けたりする中で、新たな行動にうつそうとしたり自己の生き方を見つめ直したりしている。

（２）学びが「自りつができる子ども」の育成につながっているか

深い学びの姿を見とると同時に、それが目指す子ども像（=「自りつ」ができる子ども）の育成につながっているかについても検証を行い、授業改善に生かしていく。

５．　研究の実際

本論文では３つの実践を示し、その分析を行う。なお、実践は全て６年生を対象とする。

（１）実践Ⅰ：国語科「学級討論会をしよう ～縄文時代と弥生時代、どちらが幸せか～ 」より

① 実践Ⅰの概要

ここでは、身に付けた知識や技能を活用・発揮する場として、国語科の単元「学級討論会をしよう」（６月上旬実施）と社会科の単元「大昔のくらしと国の統一（主に縄文時代と弥生時代の内容)」（４月実施）を関連させようと考え、単元計画を行った。また学級討論会（パート１＆パート２）という形で学び合いの充実を図った。

〇単元の目標

・明確な根拠をもって自分の意見を言ったり質問したりして、討論することができる。
・話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめることができる。
・大昔の暮らしについて整理したことをもとに、自分の暮らしや生き方について見つめ直すことができる。

〇単元計画

時数	学習課題・学習内容
1	「討論会の進め方や聞くときのポイントを確認しよう」 ・付録ＣＤを聞いて、気付いたことなどを出し合う。 ・討論会の進め方や説得力のある意見の述べ方について確認する。
2	「討論会の議題を決めて、自分の意見をメモしよう」 ・議題（「朝食は、パンかご飯か」、「夏休み、遊びに行くなら海か山か」、「本当に幸せなのは、動物園の動物か野生の動物か」等）について、自分の意見をワークシートにメモする。 ・討論会での役割分担を行う。
３～４	「討論会をしよう！パート１」 ・実際に討論会を行う。 ・良かった点や改善点などを振り返る。
５～６	「パート２に向けて準備を進めよう」 ・討論会パート２「縄文時代と弥生時代、どちらが幸せか」に向けて、必要な情報を集めて整理する。

	・自分の意見をメモし、役割分担を行う。
7	「討論会をしよう！パート２」 ・実際に討論会を行う。　・良かった点や改善点などを振り返る。

② 実践Ⅰの分析

ここでは、目指す子ども像（「自りつ」の観点）と実際の姿・振り返りの言葉を表に整理し、そこから見取れる深い学びの姿（吹き出し部分）を示すことにより分析を行う。なお、実際の姿・振り返りの言葉と深い学びの姿の関連については顕著に表れているものを中心に示す。（実践Ⅱ・Ⅲの分析も同様。）

目指す子ども像 （「自りつ」の観点）	◎実際の姿 ☆振り返りの言葉
自律	◎１回目の良かった点や改善点を伝え合い、それを２回目に生かすことができ、話し合いの質が向上している。 ☆相手の話をちゃんと聞く力がつきました。 ☆みんなと話し合う力が身につきました。 ☆相手の意図を考える力がつきました。これからも、相手と話すときは自分の思ったところと相手の意見を組み合わせていきたいです。
自立	◎社会科で学んだ内容をもう一度振り返り、それらを明確な根拠として意見を述べている。 ☆最初にやった時、失敗してしまったところを次は気をつけようと意識しました。 ☆考える力やまとめる力が身につきました。 ☆相手の考えや立場もとらえて、自分たちの意思も考えながらまとめられました。 ☆説明する力が伸びました。

自己の学びを振り返ることで、新たな課題を見いだし、さらなる解決策を粘り強く考えている。

自分と他者の考えを比較したり関連付けたりすることで、考えを改めたり新たな考えを生み出したしている。

自分の考えを整理したり意味付けたりする中で、新たな行動にうつそうとしたり自己の生き方を見つめ直したりしている。

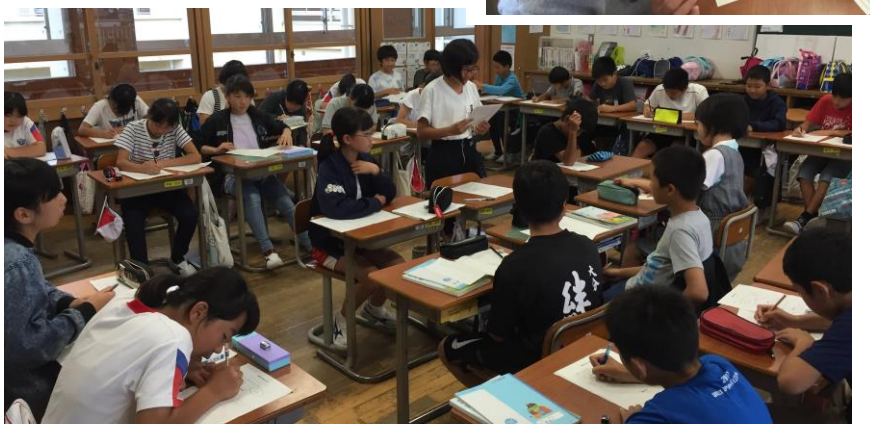
ひとつひとつの知識をつなげたり生かしたりすることで、新たな知識が増えたり考え方が広がったりしている。

自率

◎チームで話し合いながら、説得力のある主張や、予想される質問とその答えを考えている。

☆協力する力が身につきました。

自分と他者の考えを比較したり関連付けたりすることで、考えを改めたり新たな考えを生み出したりしている。



（２）実践Ⅱ：総合的な学習の時間「命を守る」（大単元名）より

① 実践Ⅱの概要

2 学期を中心に 6 年生の総合的な学習の時間では、防災（地震や津波に絞って）をテーマとして学習を進めた。地震や津波から命を守るための備え（=知識）を多面的に捉え、それらを実生活にもつなげていくことができる教材である。既習の知識がつながっていくように単元計画を行い、積極的に学び合いの充実を図るようにした。

ここに示す検証場面は、単元の中でも、身に付けた知識や技能を発揮・活用する場面として役割の大きいと考えられる 1 時間（16/27）とする。分析は、単元の最後に行った振り返りも含めて行う。

○単元の目標

・大在地区の避難の仕方について考え、探究していくことを通して、自分の命を守り、身近な人を助けるために必要な知識を身に付けるとともに、地域の防災・減災対策を知り、それらが地域の人々や行政の施策に支えられていることに気付く。

・自分にできる「備え」について考え、課題を設定し、その解決に向けて仮説を立てたり、調査して得た情報を整理・分析したりする力を身に付けるとともに、根拠を明らかにしてまとめ・表現する力を身に付ける。

・自分にできる「備え」について探っていく活動に主体的・協働的に取り組むとともに、自ら社会に関わり、今後の生活に活かしていこうとする態度を育てる。

○単元計画

別紙資料❶参照　　※検証場面で取り上げるのは、第⑯時間目。

○検証場面

別紙資料❷参照

ここでの主な学習活動は、地震が起きてから避難するまでの流れをクラス全体やグループで具体的に考えることである。子どもたちが学び合う中で、前時までの学びを生かしながらあらゆるケースや行動に気付くとともに、「自助」の大切さを実感させることのできる 1 時間であると考えた。

② 実践Ⅱの分析

目指す子ども像 （「自りつ」の観点）	◎実際の姿 ☆振り返りの言葉
自律	◎自分の考えやグループの考えを出し合うことで、あらゆるケースやよりよい行動に気付いている。 ☆班の人と意見を出し合って、3つの考えで分けたりしました。 ☆少しの考えから、「こうしたら次はこうなるんじゃない？」など意見を言い合ったりしながらできたので良かったです。
自立	◎家の中でできる備えをしておく必要性（⑬）や、防災バッグ（⑭）・防災マップ（⑮）の重要性など、前時までの学習内容を思い出し生かしながら活動に取り組んでいる。またそれらすべてが大切であることを実感している。 ◎「自助」の大切さに気付くとともに、「共助」や「公助」にも目が向いている。（「災害から命を守る3つの助け」については、5年生の社会科で学習済み） ☆「命を守る」を通して、地震が来てから色々しだすのではなく、地震が来る前から動き出すのがすごく大切だということを知りました。 ☆家に一人でいる時に地震が起きたら、ぼくはあせって冷静にはいられないと思います。なので、家に一人でいる時に地震が起きたらどうすればよいかを紙に書いて家に置いておけば、冷静に行動できると思います。 ☆学んだことをしっかり伝える力がつきました。だからこれをお母さんやお父さんに伝えたいし覚えたいです。

自分と他者の考えを比較したり関連付けたりすることで、考えを改めたり新たな考えを生み出したしている。

ひとつひとつの知識をつなげたり生かしたりすることで、新たな知識が増えたり考え方が広がったりしている。

自己の学びを振り返ることで、新たな課題を見いだし、さらなる解決策を粘り強く考えている。

ひとつひとつの知識をつなげたり生かしたりすることで、新たな知識が増えたり考え方が広がったりしている。

自分の考えを整理したり意味付けたりする中で、新たな行動にうつそうとしたり自己の生き方を見つめ直したりしている。

◎避難完了までに考えられるケースや行動を付箋に書き出し、それらを協力して並び変えている。

☆友だちと色々考えていく時に「もっとこうしないといけない」など協力もできて良かったです。

自率　☆私の家で実際にやってみたことは、家具を固定することです。何かあったときのために、もっと備えていこうと思います。

☆これからは、お家の人と話し合って、避難場所を決めたり防災バッグを準備したりしようと思いました。

自分と他者の考えを比較したり関連付けたりすることで、考えを改めたり新たな考えを生み出したりしている。

自分の考えを整理したり意味付けたりする中で、新たな行動にうつそうとしたり自己の生き方を見つめ直したりしている。

（３）実践Ⅲ：算数科「場合の数～階段の登り方～」より

① 実践Ⅲの概要

実践Ⅲは、算数科「場合の数」の単元の最後に、トピック的な扱いで行った。「場合の数」は、多様な考え方（数や式・表・図など）を用いて、起こりうる場合を順序良く調べたり整理したりする学習である。単元を通して学んだ考え方（=身に付けた知識・技能）を活用・発揮しながら取り組めるよう発展的な問題を設定した。またノート展覧会（ノートを見せ合いながら自由に考え方の交流をする活動）という形で学び合いの充実を図った。

検証場面におけるねらいや展開の仕方は、別紙資料❸参照

② 実践Ⅲの分析

目指す子ども像 （「自りつ」の観点）	◎実際の姿 ☆振り返りの言葉
自律	◎友だちに聞いた考え方を参考にしたり取り入れたりして、より簡単で分かりやすい方法を使って問題に取り組んでいる。 ◎似た考え方を見つけ、その考え方の良さを明らかにしようとしている。 ☆はじめは分からなかったけど、みんなと解いていたらおもしろい解き方があってスッキリしました。 ☆みんなが色んなことを教えてくれたおかげでとってもよくわかったし、よく考えたら簡単でした。 ☆みんな最初は答えがバラバラだったけど、最後はきまりが分かって良かったです。
自立	◎難しい問題にもまずは自分で向き合い、習った方法を使って答えを出そうとしている。 ◎自分の考え方を、言葉やノートを使って分かりやすく説明しようとしている。 ☆表を見て気づけたし、友だちにも教えられたので良かったです。
自率	◎分からないことや教えてほしいことを積極的に友達に聞いて理解しようとしている。 ◎自分の考え方を説明しながら、困っている友だちを進んで助けようとしている。 ◎分かっていることや疑問点を出し合いながら、協力して答えを出そうとしている。 ☆友だちと協力しながら考えることができました。

自分と他者の考えを比較したり関連付けたりすることで、考えを改めたり新たな考えを生み出したしている。

ひとつひとつの知識をつなげたり生かしたりすることで、新たな知識が増えたり考え方が広がったりしている。

自分の考えを整理したり意味付けたりする中で、新たな行動にうつそうとしたり（自己の生き方を見つめ直したりしている。）

自分と他者の考えを比較したり関連付けたりすることで、考えを改めたり新たな考えを生み出したりしている。

６．研究の成果と課題

（１）成果として言えそうなこと

① 深い学びを実現させるためには、まずは教師が深い学びの姿を明確なイメージとしてもっておくことが大切である。
② 「身に付けた知識や技能を活用・発揮する場を仕組むこと」と「子ども同士の学び合いの場を充実させること」は、深い学びを実現させるために有効な手立てである。
③ 常に目指す子ども像を意識しながら授業に臨むことで、深い学びの実現と子どもの成長に大きくアプローチできる。

① 深い学びの大きなイメージをもつだけでなく、単元や授業毎に「子どものこんな姿が見られたら、それは深い学びだ」とはっきりさせておくことで、その実現に近づくことができると手応えを感じることができた。

② 「身に付けた知識や技能を活用・発揮する場を仕組むこと」と「子ども同士の学び合いの場を充実させること」を意識しながら実践を重ねることで深い学びの姿を見て取ることができた。もちろん、深い学びの実現に必要な条件や手立ては他にもあるが、今年度の研究を通して、ねらいをもってこれらの手立てをとることに大きな価値があることを確信できた。

② 深い学びの実現に意味があるのではなく、深い学びを積み重ねることで目指す子ども像を育成することに意味がある。それを実感することができた。日々の授業をこなすことに精一杯になりがちであるが、常に目指す子ども像を意識するかしないかでは、子どもの成長に大きな差が出てくるであろう。

（２）課題

この 1 年間を振り返ってみると、深い学びを実現し、それが子どもの成長につながったと感じられる瞬間はそう多くない。子どもに多くの学びがあったとは言い切れないような授業があるのも現状である。また子どもひとりひとりの学びや成長の見取り方についても、確かなものであるとは言えないし、もっと多様な角度から見取っていくべきであろう。さらに今後は、育成を目指す資質・能力の 3 つの柱（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力 人間性等」）と「主体的・対話的で深い学び」の視点を関連させながら授業改善を行っていくことも、自身の課題のひとつである。

７．研究のまとめ

「深い学び」といういまいち捉えにくいものに絞って研究を進めるというのは、私にとってある意味挑戦的なことであった。「研究に大きな成果があった」と自信をもって言えないのが本音である。しかし、「深い学び」という視点を意識しながら実践を重ねたことは、必ず授業力の向上につながったはずである。子どもの姿をよく見つめ、「そこに深い学びがあるのか」「子どもの成長のために何をすべきなのか」問い続け、今後も授業力を磨いていきたい。

〈参考文献〉

・平成 28 年「中央教育審議会答申」
・田村学「深い学び」東洋館出版社、2018
・二瓶弘行、梅澤真一、山本良和、鷲見辰美、髙倉弘光、笠雷太、横山みどり、平川譲、 荒井和枝、加藤宣行「教科のプロが教える『深い学び』をうむ授業づくりの極意」東洋館出版社、2017
・田村学、黒上晴夫、三田大樹「『深い学び』で生かす思考ツール」小学館、2017